

どうみょう ろうそく  
「灯明・蠟燭」

お内仏（ないぶつ）の「あかり」といえば、一般には灯明と蠟燭の二つが挙げられます。灯明は油皿に菜種油を入れ、灯芯を浸してそれに点火します。蠟燭は朱色で、「いかり形」といって上部の肩の張ったものを用います。蠟燭を立てないときは、木蠟もくろうを立て、また白色の蠟燭を用いることもあります。

これらは、仏前を明るくするという単なる照明ではありません。迷いの中にいる我々を導いて下さる「灯火」であり、お内仏をしょうじょう清浄にしょうごん荘厳（お飾り）する「じょうか浄火」であります。

イラストは実物と異なる部分がございます。

真宗大谷派  
名古屋別院

<http://www.ohigashi.net/>



〒460-0016  
名古屋市中区橘2-8-55  
☎ 052 (321) 9201  
f 052 (321) 3184

このリーフレットは、環境に配慮したインク、用紙を使用し作成しました。

08.05.10000

えいたいきょう

「永代経をあげる」って  
どういうことですか？

真実の教えに出遇う

3

# 「永代経をあげる」って えいたいきょう どういうことですか？

池田 勇諦

家族の誰かがなくなった場合、近くの別院やお手次のお寺などに、その永代供養経の懇志を進納する—それを日ごろわたしたちは「永代経をあげる」と言っていますね。

たしかにそのとおりです。しかしそれだけでは、なぜそんなことをするのか、またその意味は何なのか、という疑問が依然残ります。それでいまわたしたち“真宗門徒にとって永代経とは何か”について、一言確かめあいたいのです。

端的に申して、そこには以下の二つのことがあるのです。一つは施主の心情です。それは何と言っても亡き人を追慕する心から、手篤く供養をしたいという願いのあらわれであることです。

ならば、それは単にご住職ら僧侶に読経さえしてもらえば供養になるというのでしょうか。そんな安易なことでは決してないはずで  
す。では、それは何か。いまは亡きある師が、ご門徒宅でその父親の年回法要をつとめられたときのことです。

施主の息子さんが「ご院主さん、今日は丁重に読経をしてもらったから、きっと死んだおやじにとどいとることでしょう」。師云く「おそらくとどいとらんとするよ」。施主はびっくり、「どうして?」。師云く「生きとるあんたにとどい



お寺をたずねて  
はい願ひじやう...

とらんのやから、死んだおやじさんにとどくわけがないと思うがなあ」。何ときびしい、だが実に言い得て妙!

「供養」は仏陀の説法を聴聞すること（読経）によって、生者と死者が真に出遇うことです。それは死者が生者にとって、自分の生きざまを問いかえさせてくださる仏だったと拝めることです。

仏法聴聞によって、そうした供養を営む道場が真宗のお寺ですから、この仏法が後々まで相續されていくようにとの願いから、亡き人を縁としてお寺の教化事業の資金を進納するというのが、いま一つの永代経のところです。その意味で永代経とは、<永代法義相續経>と言えるでありましょう。

(いけだ ゆうたい 同朋大学特任教授)